大学アーチェリー競技者における、聴覚刺激がパフォーマンスに与える影響

The influence of auditory stimulation for their performance, to college archery players.

1K10C327-1　野村 美加
主査　間野 義之先生　副査　木村 和彦先生

【目的】

アーチェリー競技は一般的に静かな状況下で行われるが、大学のリーグ戦は声援が行き交う中で行われる。やや低い脳の覚醒水準が望ましい（岡村，1981）とされているアーチェリー競技において、このリーグ戦の形式は望ましくなく、アーチェリー競技力向上の阻害要因となる可能性があると考えられる。また金本ら（2002）によると、「他者への意識」は「あがり」の原因帰属とされている。「あがり」は約 90%の競技者が試合で経験したことがあると言われており、競技者はどのように克服するかがパフォーマンスに寄与する。そのため、プレッシャーとパフォーマンスの関係性を明らかとすることが課題とされており、これまで数多くの研究がされている。しかしアーチェリー競技と不安特性の関連性に関する研究は活発に行われてはいない。また、大学アーチェリー競技に特化した研究もなされていない。したがって、本研究では大学アーチェリー競技者における、聴覚刺激がパフォーマンスに与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

実験の手順は図 1 の通りである。なお実験は 50m の距離で行い、ウェイティングライン後方にて 2 名で声援を送った。事前調査より抽出したポジティブ、ネガティブなワードを声援に用いた。また無声の回も設けた。ポジティブ、ネガティブなワードの発声および無声の回数は 12 回ずつ、ランダムに行った。

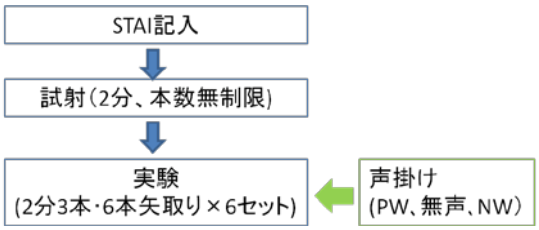

図 1. 実験プロトコル

【結果】

3 種類の聴覚刺激における得点の差を検討したが、3 群間において有意差は認められなかった。また状態不安・特性不安それぞれの高・低群と 3 種の聴覚性激における得点の差を検討したが、2 群間において有意差は認められなかった。

【考察】

聴覚刺激によるパフォーマンスへの影響はなく、「注意の焦点化」の傾向がみられた。また「あがり」の帰属する因子が個人によって異なることが示唆された。しかし、状態・特性不安高群において、PW による的中本数の増加傾向が見られたため、PW による声掛けは効果的であるとも考えられる。そのため、聴覚刺激によるパフォーマンスへの影響は全くないとは述べることができず、再度検討が必要とされる。その際に、対象者を増やし、実験前後の状態不安の比較を加えて行うことが必要であると考えられる。